

「姑蘇繁華図」と「清明上河図」

戴立強

DAI Liqiang

(中国遼寧省博物館・副研究員)

翻訳 王京

(COE研究員RA)

お招きくださった福田アジオ教授、どうもありがとうございます。この度、神奈川大学21世紀COEプログラムが主催するシンポジウムに参加することができまして、誠に光栄に存じます。今日の私の報告のテーマは「「姑蘇繁華図」と「清明上河図」の比較」であります。

中国の絵画史において、社会生活を表現する風俗画は、その豊かな内容、独特な美意識、リアリズムという手法などで知られております。宋代の張叔端^{ちゆうたくたん}の「清明上河図」と清代の・徐揚の「姑蘇繁華図」はその代表作といえましょう。これらの作品は「長巻」(画卷) という形で当時の社会生活を表現してありまして、不朽の名作であると同時に、ビジュアルな資料としても価値が高く、まさに社会百科全書的な「歴史絵巻」という名に相応しいものです。

近代以来、この2つの作品は似たような経歴を持ちます。この2つの絵画は、1920～30年代にラストエンペラー溥儀が「溥傑に賜る」という名目で、その他の書画と一緒にこっそり宮廷外に持ち出させ、東北の長春に運ばれました。1945年8月以降、さらに転々として当時の東北博物館、現在の遼寧省博物館に収蔵されました。1959年、「清明上河図」は正式に北京の故宮博物院に収蔵されることになりました。同年「姑蘇繁華図」も中国歴史博物館に貸し出しましたが、こちらは1985年に遼寧省博物館に返却されました。

以下、いくつかの部分に分けて、私なりの意見を述べさせていただきます。妥当でないところは、皆様のご指摘、御教示をお願いしたいと思います。

1. 作者の経歴と絵巻の主題

「姑蘇繁華図」の作者・徐揚は、その生没年は明らかではありませんが、先祖代々、蘇州で生活していました。彼は乾隆16(1751)年に弘曆皇帝(乾隆帝)が初めて「南巡」(江南地域に御幸)するとき、絵を献上したことで宮中に召され、画院の一員になり、挙人の身分と内閣中書という職を与えられました。乾隆24(1759)年、彼の手によって名作「姑蘇繁華図」が誕生しました。

記録に残された徐揚の作品は35点あり、いま分かっている限り、そのなかで現在に伝わっているものは22点です。「乾隆南巡図」がその1つです。この作品は計12巻あり、高さはすべて68.6cmですが、長さはまちまちで、一番長いものは1988.6cmもありました。いま中国歴史博物館とアメリカのメトロポリタン美術館にそれぞれ一部が所蔵されております。「乾隆南巡図」は乾隆42(1777)年に描かれましたが、その第6巻(長さ942cm)が蘇州

を対象にしたものです。前後20年の間に同じ画家が「全景式」の手法で同じ都市を二回も描いた例は、中国美術史においてあまり見られません。

二つの作品を比べてみると、「姑蘇繁華図」は「乾隆南巡図」に勝っております。後者は広大な場面が描かれておりますが、きまったパターンと宮廷的色合いに満ちております。皇帝の視察ですから、川の船はすべて両側の岸に寄せられており、街の通行人も厳戒によって少なくなっております。それに対して、前者は社会現実に密着し、生活の臨場感があり、芸術品として訴える強い力とビジュアル的な資料として高い史料価値を持ち合わせております。同じ万年橋を描いておりますが、「乾隆南巡図」では蘇州城内から外へと描かれており、「姑蘇繁華図」では城外から中へと描かれております（図1）。



図1 上：「姑蘇繁華図」、下：「乾隆南巡図」

「清明上河図」の画家張択端は山東東武の出身で、その生没年は不詳です。幼い頃、北宋の首都・汴梁（今の河南省開封）に遊学し、後に絵画を学び、翰林待詔という職を授けられました。現在分かっている範囲では、彼の作品は「西湖争標図」と「清明上河図」という2点がありますが、2点とも「神品」(最高傑作)に選ばれました。「清明上河図」以外で、現在天津芸術博物館に収蔵されている「金明池争標図」がすなわち「西湖争標図」であり、少なくともその早期の模本の一つであることは、一部の学者によって主張されております。

徐揚と張択端は平民出身の宮廷画家という共通の経歴を持っており、その土地の風土人情にも大変詳しい人物です。かれらの作品である「姑蘇繁華図」と「清明上河図」は、太平無事の盛世を讃えるという同じテーマを持っております。二つの作品はともに春を描いており、ともに郊外の農村から着筆しております（図2）。そこには「一年の季は春にあり、一国の計は農にある（春は一年の中で最も良い季節で、農業は一国の産業の中で最も重要なものである）」という中国で強い影響力を持つ伝統的な理念が見え隠れします。



図2 「清明上河図」



図3 「姑蘇繁華図」

「姑蘇繁華図」のもともとのタイトルは「盛世滋生図」でしたが、描かれた対象は蘇州の景色で、そのタイトルは相応しくないと、1950年代の初めに「姑蘇繁華図」と改名されました。この画卷の制作意図については、画家徐揚による跋文にはっきりと表明されております。つまり、太平の世を描き、皇帝の恩沢に対する平民の感激を表すためであります。

「清明上河図」については、「姑蘇繁華図」のように結婚とか年祝いの場面が見られませんが、しかしタイトルの「清明」という言葉からその目的が読めるのではないかと私は思います。「清明」という言葉に関して、従来清明節という季節、あるいは清明坊という地名の二通りの解釈がなされてきました。しかし、一部の学者の研究によりますと、そこに描かれているのは清明節の状況ではないとして、「清明」は季節でもなく、地名でもなく、「清明盛世」を指しているという説も出されております。

私の意見では、「清明」というのは掛詞で、「清明盛世」と同時に、時間的には清明節という意味も含まれていると思います。

2. 優れた技巧と真に迫る描写

この二つの作品は、共に「散点透視法」(多視点遠近法)という中国絵画の伝統的な技法を使っております。画家は川の流れや山の起伏を利用して読者の視線を上手に誘導しております。この技法では、建物の外側だけでなく、窓やドアを通して人々の室内での行動も見ることができます。

二つの作品はともに「散点透視法」を駆使しておりますが、具体的な運用にはそれぞれ特色があります。

「姑蘇繁華図」は「深遠法」を使用し、すなわちやや高い位置から見下ろす視角を取っております。「清明上

河図」は「平視法」を使用しておりまして、視角はまっすぐです。画卷の大きさからみれば、「清明上河図」は「姑蘇繁華図」よりだいぶ天地の幅が狭いため、このような限られたスペースの中で、大きな背景と具体的な人物の表情を同時に表現するのは大変難しいことですが、張沢端は長年の実践によって独自の技法を身につけてそれを成し遂げたと理解してよいでしょう。

徐揚と張沢端は優れた技巧の持ち主であると同時に、地元の状況に大変詳しく、その観察は微に入り、対象の特徴もよく把握しております。彼らの生き生きとした描写が、観る者を描かれた場面に引き込むような力を持っております。

以下、「姑蘇繁華図」の中の幾つかの場面を見てみましょう。

場面1：一人の男が立って食事をしております（図4）。足元にお盆や壺、まだ片づけてない器が見られます。この人は商売が忙しく、生計のために大変苦勞していることを、画家は表現しようとしているのでしょ

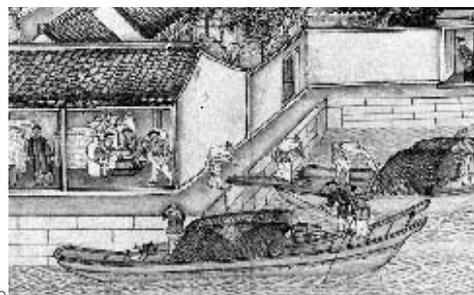


図4 斜橋たもとの米屋

う。場面2：結婚式の場面です（図5）。花嫁を運ぶ輿が庭にあります。部屋の真ん中に婿の両親が座っており、新郎と新婦がシルクで作られた「牽巾」の両端をそれぞれ持ち、両親に対してお辞儀をしようとしております。新郎はすでにひざまずいておりますが、新婦は赤い布を頭に被っているのでまわりの状況がよく見えませんから、付添人の手伝いを借りてこれから跪こうとしております。200年も前の結婚式の一場面が生き生きと伝わってきます。

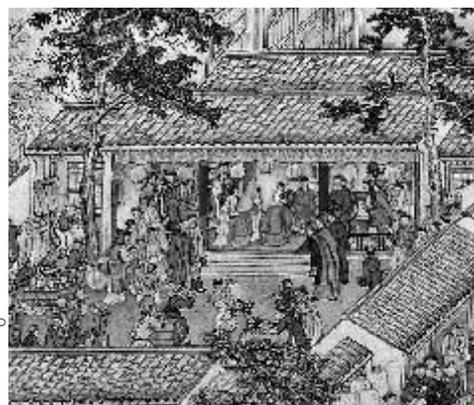


図5 結婚式

場面3：芸人の女の子です（図6）。彼女は綱渡りをしております。その手にバランスを保つために長竿を握っております。その芸は大変すばらしいようで、隣の飲食店の人たちも階上の窓から見ております。その描写は真に迫り、そこから生活の匂いが強く感じられます。

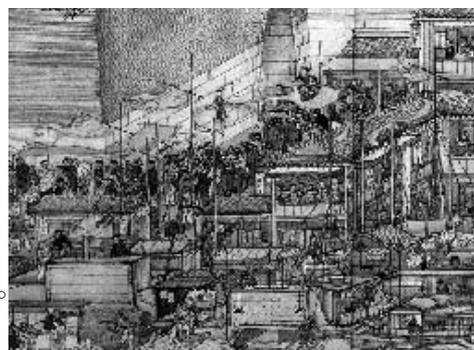


図6 芸人の少女

次に「清明上河図」の幾つかの場面を見てみましょう。

場面4：二人の男が飲食店から出てきております（図7左）。穴に紐を通して貫いた銭を幾つも手に持っております。そばの男は銭貫を数えているところです。そしてこちらは宋代白沙墓で発見された壁画です（図7右）。画面上、同じような銭貫を男が肩に掛けております。ここからも「清明上河図」の写実性がうかがえます。

場面5：堀に架かった橋の上に、貨物を積んだ荷車があります（図8左）。二人の男がおります。一人は前で引き、一人は後ろで押しております。車を引くロバは、首を長く伸ばして頭を下げております。荷物は大変重いことがこれで分かります。

場面6：同じ橋の上の真ん中では親子が物乞いをしております（図8右）。見物の男が嫌々ながらお金を与え

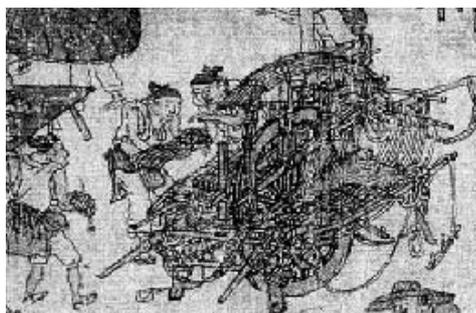


図7 左：銭貫を数える男 右：白沙宋墓壁画



図8 左：荷車 右：物乞いの親子

ております。そばの男が子どもを一人連れていて、赤ちゃんも抱いております。彼は子どもと遊んでいる振りをして、一所懸命にねだっている物乞いの子供をさっぱり相手にしてくれません。画家の筆で、世の中の冷たさまでが描き出されております。

3. 二つの「虹橋」

「清明上河図」と「姑蘇繁華図」には、ともに「虹橋」という橋が登場します。「虹橋」というのは俗称で、名前は橋を支える柱がないことに由来しています。

「姑蘇繁華図」では橋の上に多くの人々の往来があり、混雑しております（図9上）。そして橋の上の両側には、多くの露店が出ております。橋の4ヶ所に灯籠が掛けられております。これは照明用であります。当時夜にも市がたっていたことを推測させます。

「清明上河図」の橋も多くの人で賑わっていますが、「姑蘇繁華図」よりさらに混雑さを増しており、秩序のない印象を受けます（図9下）。商売人は自分の都合で路面を不法占拠しております。宋代ではこの現象を「侵街」と呼びました。

次は「清明上河図」に出ている「華表」を見てみます（図10）。橋の両端に2本ずつ計4本が立てられております。これまでずっと風向計だと思われてきましたが、間違いなく華表とみるべきでしょう。

「今の華表は、横木を以て柱頭に交差し、その状は花のごとく、形は桔槔のごとし。大路、交衢には悉（こと

ごと) く施す」(晋代・崔豹『古今注・問答積義』)。

画卷に描かれた華表はこの文献の記録と一致しております。華表の先端にある鶴については、文献記録によって裏付けられております。

「古は鶴を以て吉祥とす。故に之を華表に立たす」(陸璣著、毛晋注『毛詩陸疏広要』)。

こちらは現在天安門の前の華表であります。先端にあるのは獅子であります。絵巻のものと大きく異なっております。そして「姑蘇繁華図」には多くの橋が描かれておりますが、このような華表は見つかりませんでした。後に、こうした伝統が廃れて、これが華表であることさえ次第に忘れられ、風向計という誤った解釈がなされたのでしょう。

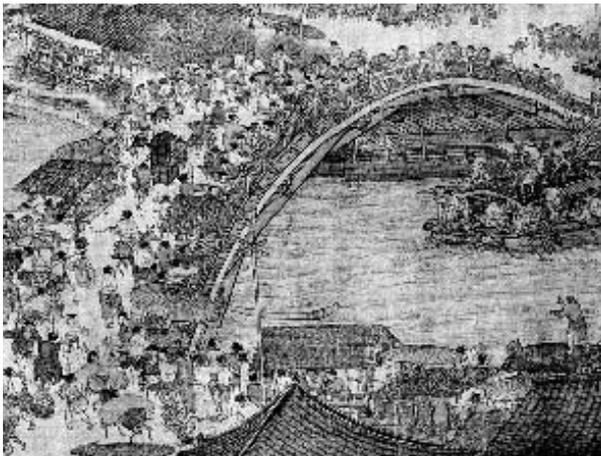
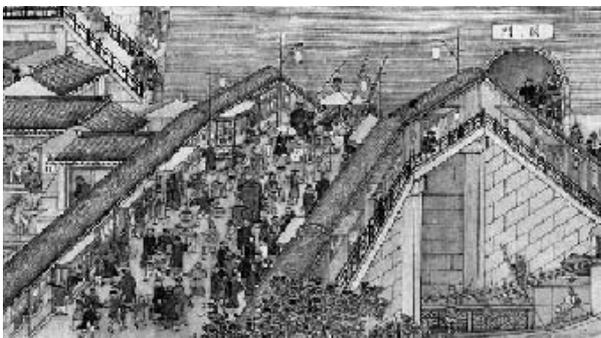


図9 上：「姑蘇繁華図」の虹橋 下：「清明上河図」の虹橋



図10 左：虹橋の華表 右：天安門の華表

4. 女性の不在

「清明上河図」と「姑蘇繁華図」には多くの人物が描かれております。しかし、女性は非常に少ないのです。「清明上河図」には700人以上の登場人物が描かれています。「姑蘇繁華図」になるとその数は4800人を上回っておりますが、しかし、その中で女性は110人未満です。これは当時の社会観念と深く関わっております。封建時代では男女は隔離されており、女性の纏足も宋代から始まったものです。この二つの作品は公の場を対象としているので、そこに女性が見られないのは必然的な結果になります。

「姑蘇繁華図」で一番多く女性が描かれているのは、芝居を鑑賞する場面であります(図11上)。そこで、女

性と男性は別々に分かれております。使用人が控えているところから、ここの女性達は身分の高い人々のようです。

「清明上河図」の場面です。この女性は子どもを抱いております（図11下左）。この女性は花嫁を運ぶ輿のそばに立っております（図11下右）。これは社会の風俗を反映していると同時に、公の場には女性を描くべきではないという画家の観念にも関係しています。

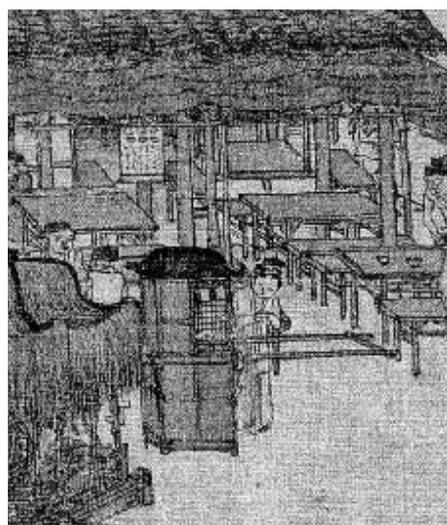
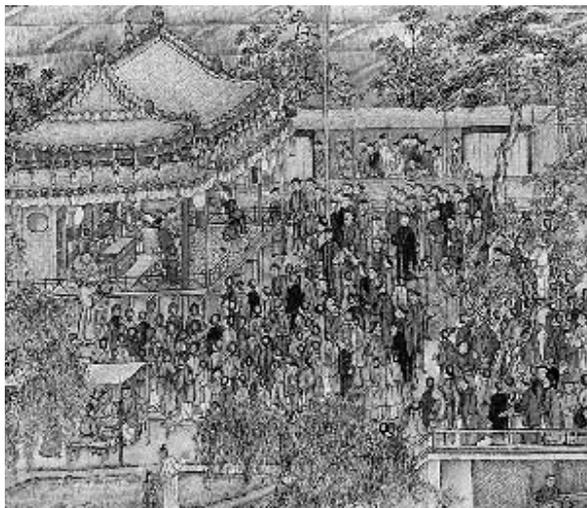


図11 上：芝居鑑賞
下左：子供を抱く女性 下右：輿の側に立つ女性

5. 看板いろいろ

「姑蘇繁華図」の場面です（図12）。薬屋、油屋、そして「錢莊」(民間金融機関)、布屋などがあります。統計によりますと各種看板は300を超えており、50種以上の職業を表しております。

それに比べますと、「清明上河図」では看板の数はずっと少ない。「彩楼欲門」というものがあります（図13）。絵の中で7回登場しております。これも一種の看板に当たります。遠くから見られますし、飲食店があるという

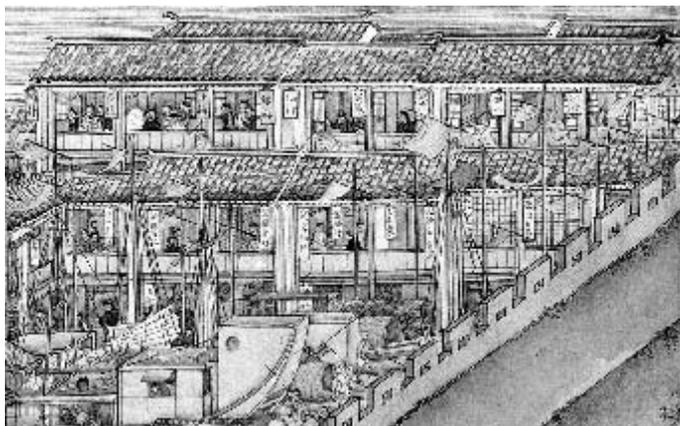


図12 「姑蘇繁華圖」の看板

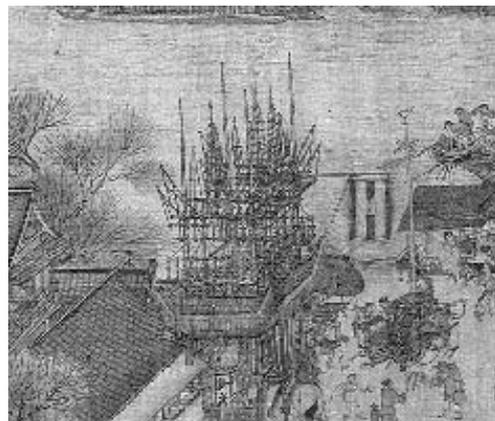


図13 「清明上河圖」の「彩樓歡門」

表示です。こうした建物は後に無くなりました。

偶然にも二つの作品にはともに祭祀用品の店が描かれております。「清明上河図」の「王家紙馬」という看板です（図14上）。その中に紙で作られた建物などが展示されております。「姑蘇繁華図」の「香燭紙馬」という看板です（図14下）。お客さんが買い物をしようとしております。また偶然にも二人の画家はともにこのような場面を画卷の周縁に配置しております。この看板は、たぶん春という季節、清明節前後を画家が表現したいことと関係するでしょう。



また、「清明上河図」で看板が少ないのは、経済の発展とも関係します。たとえば銭荘、綿屋、煙草屋など「姑蘇繁華図」には登場する職業は、宋代以降に現れたものであります。もう一つの理由は、現存する「清明上河図」が原画の一部であるからでしょう。記録によりますと原画は7メートルもあったようですが、現存するものは5メートル余りしかありません。誠に残念です。



図14 上：「清明上河図」の「王家紙馬」看板 下：「姑蘇繁華図」の「香燭紙馬」看板

「清明上河図」も「姑蘇繁華図」も文献記録には書かれていない多くの情報を含んでおります。神奈川大学21世紀COEプログラムは、研究者の更なる研究の深化のために良い基礎をつくってくれると信じております。

ご清聴、ありがとうございました。